
ヤンデレ少女でドン！

一期 つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレ少女でドン！

【Zコード】

Z4814Z

【作者名】

一期 つかわ

【あらすじ】

それは突然だった！ 幼馴染みのハーフでしかもオタクな変態少女、川崎ジェシカが「あんた変態女にストーキングされてるよ！」と俺に報告してきた！ その日から、ヤンデレ少女の恐怖が俺に襲いかかる！ ヤンデレ以外にも変な女の子がたくさん！ （ハーレム目指しつつヤンデレ展開目指します）。

第0話 キャラクター紹介！（前書き）

話の展開とかはあんまり気にしない方がいいです。

第0話 キャラクター紹介！

一般人

・那霸 翔 (15)

「ヤンデレでドン！」の主人公。中3。それぞれ、相手によつて口調を変えるめんどくさい性格。

一番身近な幼馴染み・ジョシカには「～ッス」と下から。

洋画好きで、邦画が苦手。

・川崎 ジョシカ (15)

本人曰く「ベラルーシとウズベキスタンのハーフ」。川崎三姉妹の次女。

日本のアニメ（特に深夜アニメ）とアニメソンをよく愛するオタク少女。

パソコン部の部長で、部活内でのあだ名は「変態」や「痴女」。学校以外での服装は、大概コスプレ。

翔と同じで洋画が大好きで、邦画を軽視している。

・川崎 雪 (13)

本人曰く「アゼルバイジャンとスウェーデンのハーフ」。川崎三姉妹の三女。

オデコが広いことを気にしている中学1年生。

笑いのツボが一般どぞれていて、例えば、机に置いてある他人の教科書の向きを逆にする、など、シユールにシユールを重ねた事に面白さを見出だしている。

他にも、「謎の」や「～になつちやうよー」という言葉を面白がつてゐる。

自分だけ純日本名であることに疑問を感じてる。

・川崎 レベッカ (17)

本人曰く、「インドとアンディイグアバーブーダのハーフ」。川崎三姉妹の長女。

雑でめんどくさがりだが、18禁アダルトサイトには入らなかつたり、無駄にきつちりしてゐる。

男っぽい口調だが、運動神経は無い。

親に反発してゐるが、たまたま翔の家で映画「A・I・」を観て、感銘を受け、親孝行をするようになる。

・浜松 夏海 (15)

一人称は「浜松」。ドジっ子で毒舌家。しかも説教癖がある。キレると騒ぎ出す。

その割りには、弁当にドリアンなどを持つてきたり、ボケたがる癖があるが、すぐ緊張して、口ごもつてしまい、いつも空回り。

・函館 冷 (15)

クリスチャン。ダイエット中。聖書を常に持ち歩いてゐるが、実は「バベルの塔」までしか読んでない。

弁当を食べる前にお祈りを欠かさない。しかし、お祈りが曖昧で一斉にツッコミを受ける。

神経質で、いろいろなことに対しても反応する。でもって声が大きく、迷惑がられる。

・三浦 南海 (15)

転校生。金髪でケバくて鋭い目をしてゐるが、それは前の学校でお人好しキャラで失敗したため、無理してキャラを作つてゐるだけ。優しさが滲み出て、たまに人が良いことがバレそうになる。

ヤンデレ様

1、木更津 かずさ (17)

翔の家の近所に住む無口な高校生。

2、宮崎 千秋 (23)

小学校の新任教師。翔の歳の離れた幼馴染み。

3、長崎 遠依 (13)

翔の隣の家に住む中学生。排他的で、翔以外の友達を作らない。

他にもいるよ

第1話 転校生モンスターと転校生！

「翔ちゃん、聞いた！？」

ジェシカは教室のドアを開けるや否や、目を輝かせた。真っ先に視線をやつたのは、まだ生徒がまばらな教室の、片隅の席でポツンと座つて窓の外を眺めていた、翔だつた。

翔はゆっくりと体を捻り、ジェシカと目を合わせた。

空いてた席から適当に持ち出した椅子に座り、その席の生徒がたじろぐのもお構い無しに、ジェシカは翔に顔を近づけた。その顔は莞爾といつ言葉以外思い当たらぬぐらに綻んでいた。

「ねえ！ 聞いた！？」

「え？ どうしたんスか？ なんの話ツスか？」

翔はあまりの迫力と唐突に「聞いた！？」と訊かれたことに混乱し、目を丸くした。顔が近いことよりも先に、ジェシカの異常なまでのテンションの高さが気になつた。

オレンジがかつた髪は首元まで伸びていて、瞳は青く、他人よりも彫りの深い顔は、日本人ではないことは明々白々だ。肌は白く透明感があり、頬は、リンゴ病の発赤を彷彿とさせるほど赤かつた。

顔が近いのを恥ずかしがることなく、嬉しそうに、体を揺らす姿は、少しでも衝撃を与えれば膨れ上がつた風船さながら大きな音を立て破裂しそうだつた。

「とにかく、大変なの！」

ジェシカはまた、叫んだ。語調は強く、噛み締めるように両手を握りしめる。

翔は、自らの閉口具合をフィルターにかけることなく、そのまま表情にし、周囲に一瞥いちべつを向えた。ジェシカに席を取られた生徒がどこか物寂しげに犯人の後ろ姿を眺めるだけだった。

「何が大変なのか、言つてくれないと、困りますよジェシカさん」

視線をジェシカに戻すと、やはりジェシカの顔が近い。今度はそのことに驚いて、反射的に身体が仰け反る。

「何がって、転校生よ転校生！　転校生！」

ジェシカは、嬉しそうに「転校生」という言葉を繰り返し、一人で飛び跳ね、盛り上がる。

ひとまず顔が離れたことに安心し、体勢を元に戻し息を吐く。

体育の授業があるわけでも、運動部に所属しているわけでもないのに、ひとえに「めんどくさいから」という理由でジェシカは普段からジャージ上下を着ていて、彼女が制服姿の時は、ほとんどが集会など、制服を強制された時だけだ。

ふと、ジェシカが小さく「ドンビドン」と口ずさんでるのが聞こえた。

それがクツキーモンスターの真似だとはすぐにわかった。

「クツキーモンスターって、自分を抑え込むのが苦手なだけで、案外、まともなキャラなんだよね。それに可愛いし」数年前にジェシカが淡々と語っていたのを思い出した。「クツキーとか食べ物を目前にしたら、興奮してすぐに口に入れちゃう」

今の「転校生」に興奮してはしゃぐジェシカが、食べ物を前にした、もしくは食い荒らしているクツキーモンスターに見えて少し頬が緩んだ。

同時に、転校生がジェシカの欲を搔き立てたのか？ と可笑しくもなった。

「女の子だつて！」

ジェシカがまた、翔に顔を近づけた。

「女の子に興奮してるんスか？」思わず声を洩らした。

「私がレズなら、翔にこんなに顔を近づけたりしない。気色悪い」

ジェシカは目を細めた。

「どんな子が来ると思う？」

表情を元の潑刺としたものに戻すと、ジェシカの吐息があつと翔に吹きかかる。

恥ずかしさからなのか息を止めてしまつ。田を他所に向け、「えーつと」と考へ込むフリをする。

「三浦 南海！」

フライング気味にジェシカが言つ。明らかに翔の答えなど待つてい
ない風だった。

翔の脳裏では、まだ「どんな子が来ると思ひ？」といつ言葉が反芻はんすうして
いた。合ハの手を打つよつて、合聞合ハムハムに「適当な女」といつ
言葉も繰り返された。

「せつとき会つたんだ。握手してきた！」ジェシカは自慢ほこら気に右手を
翔に見せた。「でも、そんな良い子じゃないね。ジェシカの表情
が一瞬だけ曇つた。「だつて、私に『ははははははH e l l o !』
つて言うんだよ。すゞい焦つてた！」

「仕方ないつスよ。それはジェシカさんが外国人の顔をしてるから」

するとジェシカはひゞく落胆した様子で、「はあー」と溜め息を
吐いて翔の机に顔を伏せる。

ひょこんと顔だけ上げると、「だからハーフって辛いんだよねー」と眉をひそめた。

「ジェシカさんって、ビーチビーチのハーフでしたっけ？」翔は半笑
いで言つた。

ジェシカは上目で翔を見ると、迷つことなく言つた。

「ベラルーシとウズベキスタン」

第2話 「ついでありますよ！」

「三浦南海、よろしく」南海は声を張った。

唚然とする生徒たちの視線の中を恥ずかしげることなくずかずか、堂々と歩き、空いていた席へ移動した。

黒板には大きな字でしつかり「三浦南海！」と書かれていた。

「あの……」

担任の女教師が声を掛けたのは、すでに席に座つてからだった。

「なんですか？」

鋭い視線と刺すような声に、担任は一瞬同様する。

長い髪は金色に染められていて、眉も剃られ、あからさまな不良生徒だった。

「み、三浦さんの席はそこじゃなくて、こっち」担任は離れた別の席を指差した。「そこは、飯田君の席、今日、風で休みなの」

南海は指差された席に目をやる。その後で周囲をぐるりと見回す。相変わらず生徒は目を丸くしている。

南海の額には汗が滲んでいて、状況から考えて、恥ずかしさからの明らかに冷や汗だ。

何の意地なのか、南海は担任をキッと睨んだ。すぐに、机の上に置いた鞄を持ち、席を移つた。

南海の席は、ジョシカの隣だった。

「よひしへ、私、ジョシカ、さつき会つたよね」

ジョシカは怯むことなく優しく声をかけた。

ジョシカの脳裏には、声をかけたことで飛び跳ねて驚いた南海の姿が浮かんでいた。

「覚えてない」南海は短く、言つた。

「ううん、覚えてるよ。だつてさつき会つたもん。握手だつてしたよ」

ジョシカは右手を突き出して見せつける。

南海は煩わしそうに横田でそれを見やると、無視して視線を前に向ける。

「みつちつて、映画とか観る？ 私は、よく観るよ。3D映画はMAXでしか観たことないんだけど、普通の劇場だとどうなの？ すごく気になるんだよね」

無視という概念は無いと言わんばかりにジョシカは続けた。

教壇の上では担任が話し込んでいたが、南海はそれを聞く気などさらさら無かつたが、ジョシカの方には絶対に視線を向けないと、た

つた今、決めた。

しかし、いつの間にか自分のことを「みつむ」^{みつむ}と呼んでいたことを、鬱陶しさが追い越し、頭の周りをぐるぐると回って集中力をかき乱した。

「邦画ひじりうへ。私はあんまり好きじやないんだよねえ。なんか
ひつ
」

得意氣に語るジェシカは、気がつくと南海と田が合っていた。

「ひぬわこですけど！」南海はまた、声を張った。

それと同時に別の生徒が、「ひぬわこー」と叫んで、そつちに視線がいった。

担任の声も止まり、生徒の視線が声の方へ向く。

それを辿ると、立ち上がり、一人の方を睨む女子生徒が、いた。この三年一組の学級委員、浜松 はまつなつみ 夏海なつみ だ。

南海も体を捻り夏海の方を見る。一見、小学生にも見える小柄な姿が目に入った。夏海は堂々と腕を組んでいた。

「誰の妹？ あの幼稚園児」南海はボソッと呟くに呟いた。

すると、何やら物音がした。夏海が動搖したのか椅子に足をぶつけた音だった。

「小学生ならじょつちゅうづ言われるけど、幼稚園児はあんたが初め

て。この擦れつ枯らしの、アスホールズベ公が！」 夏海は南海に向かって中指を突き立てる。

発音良く「アスホール」と言つたことに、ジェシカは思わず吹き出してしまつ。

「浜松さん！」 担任がすかさず叫ぶ。「いけません、その指。あと、言葉遣いが悪すぎます。もつと優しく声をかけてください」

夏海は担任の方を向くと、「アメリカとか海外なら、これが悪い意味になるかもしないけど」 中指を立てながら言い訳を始めた。「別にこれが日本人にとつて罵る意味になるとは思えません！」

「とにかく謝つてください！」

担任が南海に一瞥をくれると、怒りからか、微かに震えているのが確認できた。

「じゃあわかりました」 夏海は南海の方へ向き直つた。「訂正します

す

「訂正？」と担任が言つるより先に、夏海は思いつきり右手を突き上げてから、一気に顔の前までふり下ろした。一瞬の動作だつた。

親指を下に向け、にたりと笑い「これなら日本人でもムカつくでしょ？」と言つた。

「どうちも一緒」 ボソッヒツツコんだのは、翔だつた。それと重なるように「なつち性格悪いー」とジェシカが目を細める。

「おとなしい金髪眉無しと、騒がしくて口が悪くてバカなチビッ子、どつこがまとも？」南海の頬が緩む。

南海と夏海のことと言つたのだろうが、自分で自分のことを「おとなしい金髪眉無し」と表現したことに生徒は驚く。

南海は何事もなかつたかのよつこ、余裕の表情で前へ向き直つた。

怒りで平常心を失つたのか、夏海は顔を真つ赤にして「アイロニー！」と前屈みになりながらも、発音良く叫んだ。

「あそこまでなつちを怒らせたのは、みつちが初めてかも」ジェシカは南海に、小声で、耳打ちするよつこに言つた。「バートみたいな顔してゐるもん」

南海は一瞬「バード？」と思つたが、「ああ、バートね」と、何のことを言つてゐるのかわからないながらも、納得した。しかし、ジェシカの声に耳を傾けていたんだと気が付くと、顔を振つて、頭にしがみつくジェシカを振り払つた。

ふと気が付くと、ジェシカの姿が席に無かつた。今のでどこかへと吹き飛んだのか、と一瞬だけ安心。だが、そんなバカな話無い、と我に返る。

喚き散らす夏海の方へ視線を向けると、ジェシカが夏海の前に立つていた。

夏海の視界にジェシカは入つていなかつたため、夏海はジェシカの存在に気がつかない。

「カーワーバンガー！」

ジェシカは力強く叫ぶと、夏海の肩を両手で押さえると、「あむー」と声を上げ、吸血鬼さながら首元にかぶり付いた。

「あん」夏海の喘ぎ声が響く。室内はシーンとする。

ジェシカは畳み掛けるように、何度も甘噛みする。

夏海は噛みつかれた回数と同じだけ喘ぎ声を上げて、気持ちよれずに脱力し、とんと腰をおろす。

彼女はすっかりおとなしくなっていた。

第3話 好きな声優は？（前書き）

ヤンキーが出来るのもいつか先にならなければなりません。

第3話 好きな声優は？

授業中、南海の顔がすぐれないのを、ジェシカは見落とさなかつた。

「教科書、見せよっか？ 忘れたんでしょ」

ジェシカが小声で言つと、南海はムツと不機嫌そうな顔をする。図星だとは、すぐに分かつた。

有無を言わさず、ジェシカは机をくつつけようとする。

「あ……」喉に何かが突つ掛かつたのか、南海は口を小さく開けたまま静止する。ジェシカの顔が至近距離にまできていた。

南海は「」そと脇にかかつた鞄を漁り、手鏡を取り出すると、ジェシカには見えないように自分の顔を確認した。

化粧をしていたわけではないので、化粧が崩れたわけでもない。

ただの金髪眉無しが、鏡にうつっていた。

「やうよ……」小さく、短く、言い聞かせるように呟くと、鏡を鞄にしまい、ジェシカを睨む。

顔を少し下に向けて、上目で睨む、なんとも、わざとらしく。眉無しなだけあつて、少しほ怖かつた。

「スーパーイヤ人ともさ」ジェシカは全く動搖する様子などなかつた。「眉毛無いよね。髪長いし、金髪だし」

「はあ？」南海は威圧するよつて顔を近づける。

「私女の子とキスとか、したことないけど、一度はしてみたかったんだ」

やはりジェシカは怯まなかつた。それどころか、さらに顔を近づけ、南海の唇に自らの唇を重ねた。

誰かがそれに気がつき「おいー」と声を張り、二人を指差す。一人のキスは、大衆環視の中に晒された。

「何やつてんスか」冷静に言つたのは、翔だつた。「ジェシカさん」南海は、一瞬、何が起きたかわからずにつ、止まつてしまつたが、すぐに対し、翔を押し倒す。

がしゃん、といつ音と「あやあー」という悲鳴が室内に響く。

「何やつてんだ！」国語の教師が怒鳴る。

「ジェシカさんが三浦さんにキスしたら、三浦さんが嫌がつてジェシカさんを押し倒したんです」翔が起き上がるつとするジェシカを指差す。

「違います」倒れた椅子を戻し、ジャージをはたいて座り直したジェシカは、ピシッと手を上げた。「みつちは確かに言いました。『今はダメー』って。これつて、後でなら良いつことですね？」

もちろん、南海が「今はダメー」だなんて言つたはずはない。教室

内は呆れた空氣でじんよつする。

「とにかく、今は授業中なんだから」国語の教師はチヨークでジョシカと南海をさす。「授業が終わってから解決しなさい。いいですね」

ジョシカは悪びれながらも横目で南海を見る。怒りに身体を震わせる南海がいた。顔はうつ向いて、どんな表情をしているのかわからない。

ただ、この上無く不機嫌だということだけはわかった。

「ドンマイ」ジョシカは南海の肩にポンと手をおぐ。すかさず、南海は「うるさい！」と素早い動きでジョシカの手を払う。そのままは、うつすらと潤でいた。

「やうだ今日や、近所の高校生の女の子がいるんだけど、その子、なんか変なんだよね。先輩だけど。放課後追跡するんだ。みつちも、どづく。」

ちらつとは見えたはずの涙顔をすつかり忘れた様子で、誘う。

「ジョシカちゃん」後ろの席の女子生徒がジョシカの肩を叩く。

「なあに？」ジョシカは間延びした声で反応し、身体を後ろに向ける。

いざ後ろを向かると、女子生徒は氣後れしてしまい、身体が自然と仰け反る。

ジェシカは顔を傾け、不思議そつた顔をする。女子生徒が何か言ったそつだと、振り向いた直後に察知していた。

「え、えーと……」女子生徒は目を泳がせて、拳動不審だ。

「早く言つてよ」ジェシカは身体を揺らして急かす。「なに？ なに？」

女子生徒は深呼吸すると、ジェシカの目を見る。

「アニメソングは聴きますか？ それと、三浦さんが可哀想です！」

取つて付けたような、といづより意味不明な言葉だと、言つたそばから思つたが、言い直す勇氣は無かつた。

「もちろん、そりや聴くよ！」ジェシカはにつと頬を緩める。

「三浦さんが可哀想です！」が本命だつた女子生徒にとつて、期待外れの応えだつた。それも自分が悪い、と言い聞かせる。女子生徒はアニメソングに興味などなかつた。

「え？ 聽くの？ アニソン」ジェシカは女子生徒の心の内は察知せず、ずかずかと踏みいるよつに追求する。

「え、その……」女子生徒は絵にかいたような狼狽をする。目は泳ぎ、助けを求めようと周囲を見るが、誰もこの状況に気づかない。声をかける勇氣もなければ、教師に伝えることもできなかつた。

「私は、ちょっと地味つて言われるけど、坂本真綾が好きだなあ。みんな、水樹奈々が好きだつていうけど」

当然、女子生徒には何の話か理解できない。

「真綾は、『プラチナ』とか『トライアングラー』とか、アニメーションが注目されがちだけど、もっと掘り下げれば、いっぽいいっぽ良い曲あるよ」ジエシカは構わず続ける。指を立てて得意気に語る。「例えばほり、『トシャツ』とか『オレンジ色とゆびきり』とか『パイロット』とかね」

女子生徒は「は、はあ……」としか返事ができず、それよりも、自分に「好きなアニメは?」と質問された場合のことを懸念する。

「好きな声優は?」予想は外れたが、もっと難しい質問が飛び出した。「せいやう」と言われて一瞬、大型スーパーのことを思い浮かべる。

「ま……」

「ま?」一瞬、脳内で「ま」で始まる声優を探つたが、すぐには見付からない。

「ま、的場浩司……」

思わず、プッと吹き出したのは、ジエシカではなく、南海だった。

第3話 好きな声優は？（後書き）

作者が真綾好きなだけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4814z/>

ヤンデレ少女でドン！

2011年12月17日19時50分発行